



## 小さなドローイング・ルーム

部屋番号 5

この魅力的な部屋は、18世紀の改造の際、廃墟となっていた古い南東の塔の跡に建てられました。イオニア様式の支柱で支えられ、また彫刻された木製装飾を頂いた暖炉があるこの部屋は、ジョージ王朝様式の素晴らしい一例です。

暖炉の両側にある優美な彫刻の施された「壁張り出し燭台」と、ピーター・レリー卿作チャールズ皇太子(129)及びスタンレー卿チャールズ(80)の肖像画の収められた「額絵」は、ロココ様式の良い例です。 クルミ材のキャビネット、及びユニオン・セット呼ばれる一対の漆塗りキャビネットは、アン王女時代のものです。漆塗り用簞笥は7世紀末期の日本製です。

この鱗模様で装飾されたマホガニー材の八脚の椅子はジョン・ゴードン作で、1756年126ポンド10シリング(26ポンド50ペニス)しました。 原本の請求書が数多く城内の文書保存庫に保存されており、その何点かは各部屋に展示されています。

繡の施された火よけが、18世紀には良く使われていたことをご存じですか？ その時のレディ達は蟻の含まれた化粧品を使っていたため、火よけが暖炉からの猛烈な熱を遮り蟻の溶けるのを防いで、「涼しげで趣のある」表情を保つ役目をしました。

絵画：窓際の系図をご覧下さい。

道具：丸テーブルの上にある額入りのリストをご覧下さい。



## ダイニング・ルーム

部屋番号 7

ダイニング・ルームとそれに続く控えの間は、本来16世紀の宴会大広間の様式でしたが、18世紀、第二代公爵により現在見られる華麗なバロック様式に改装されました。

オリジナルの天井と暖炉の上の「武具の戦利品」の漆喰も、トマス・クレイトンの手になります。 残念ながら天井を支えていた木材部がキクイムシに侵された為、1985年5月この天井の半分が落ちてしまいました。修復工事はピープルの L. グランディソン & サンズ社に依頼しました。未だにこの様な細かく複雑な作業をこなせる職人がいるということは嬉しいことです。暖炉の大理石の細工は、1751年にロンドンのトマス・カーターが手掛けました。彼はまた、暖炉の右側にあるイタリアのカララ産大理石で作られたワイン用水槽も彫刻しています。

トマス・バードウェルの作の天井の円形画には、四季が描かれています。「トマス」という名前が多いですね！ 壁のパネルに描かれた風景画はアソル領地内の景色で、ダンケルド在住の時計職人の弟チャールズ・スチュワートの作です。

マホガニー材で作られたジョージ王朝時代後期の素晴らしいテーブルは、ロバート・フィロン&カンパニー社が、マン島にあるモナ城に1805年に収めたものです。テーブルの大きさは、9枚の挿入セクションで調節できます。ディナーセットは伊万里風に描かれたウスター製及びローヤル・ウスター製です。 大ゴブレット(Tallboys)には、9ペイント(5リットル強)の容量が入ります。

テーブル中央に置かれた、地元ティルト渓谷産大理石の台座に載った銀製の雄鹿は、第七代公爵夫妻の銀婚式を祝して、1888年アソル領民から贈られました。

部屋の南側に飾られている軍旗は、ビクトリア女王がアソル公爵に、私兵「アソル・ハイランダーズ」を所有する権利を公式に認可する象徴として贈られたものです。 この部屋は今でもレセプションや小晚餐会などに使われています。

絵画：大理石の上板の載ったテーブルに置かれた小さな系図をご覧下さい。

家具：大理石の上板の載ったテーブルに置かれた大きなパネルをご覧下さい。



# 控えの間

部屋番号 8

この部屋は、1996年に亡くなった第十代公爵の一生を紹介するため、1996-7年の冬に模様替えされました。

第十代公爵の生存中に描かれた大きな肖像画の下にあるガラスケースには、ローヤル ナショナル ライフポート インスティチューション 彼の生涯や業績を垣間見る、写真や記念品が展示されています。彼は王立救命船協会会長、スコットランドのナショナル・トラスト会長、ウエストミンスター・プレス社長を努め、また貴族院の一員としても活躍しました。

公爵の右側にあるブライアン・オーガン作の大きな肖像画は、彼の母堂アンジェラ・キャンベル・プレ斯顿です。

その下の左側のガラスケースには、スコットランド騎馬師団スコティッシュ ホース レジメント を起こした第八代公爵とスコットランド初の女性国會議員で女性初の保守党大臣になった彼の妻キャサリン、および第九代公爵の写真が飾られています。

中央のケースには、第十代公爵のご両親、1945年に戦死したアンソニー・マレイと彼の妻アンジェラ(旧姓ピアソン)の写真が展示されています。アンジェラは1950年6月に、R. M. T. キャンベル・プレ斯顿陸軍中佐と結婚しました。

その右側ケースには、第11代アソル公爵ジョン・マレイと、彼の家族の写真が飾られています。

壁に展示された写真には、第十代公爵と彼の家族だけではなく、第八代公爵夫妻と第九代公爵、それに彼らの弟ジョージと妹ヘレンも見られます。

ジョージ・ハーバート・マレイ(236)の肖像画は、第十代と第11代公爵のつながりを象徴するもので、彼は前者の曾祖父に当たり後者の大叔父に当たります。

椅子の刺繡はアソル家のレディ達の手になり(1750~60年)、中央のテーブルはブロッホ製です。城内の他のところでもブロッホ製の家具が見られます。



## 青の寝室

部屋番号 9

この部屋は、城内で最も古い「カミンの塔」のオリジナルの部分に当たります。壁の厚さと空気の冷たさを感じて下さい。

18世紀の4本柱ベットの左手にあるドアは、城内に唯一残るバスルームです。その他にあった幾つかのバスルームは、観光客の皆様が一方通行方式で自由に見学出来るよう、取り除かれました。

ここに置かれた家具の殆どは19世紀のものです。前面が湾曲した衣装箪笥と、その両側の一対の低いキャビネットは摂政時代のもので、マホガニー材に紫檀の化粧張りが施されています。一式のウイリアム四世時代の家具は、エジプトパピルスの葉で装飾されています。中国風の椅子一揃いは、1756年から1760年の間にロンドンのマスター・ズから購入した、チッペンデール製です。

第六代公爵夫人アン・ヒューム・ドラモンドの刺繡したクッションが、日中に横たわるベット・ソファの上に置かれています。それには、ヒューム・ドラモンド家の印であるヒイラギと、マレイ家の印であるトショウがデザインされています。

大きな肖像画(65)は、第七代公爵夫人ルイーザ・モンクリーフで、彼女はビクトリア時代の著名な美女の一人でした。彼女の身に付けているアメジストのネックレスは、地上階にある宝物室で見られます。

絵画：部屋の出口横の系図をご覧下さい。

家具：戸棚の上の詳細をご覧下さい。



## ブレア城に於けるバスルーム

部屋番号 9A

城内の各部屋に、「何時バスルームが設置されたか？」の疑問に対する正確な日付を確定するのは困難ですが、第七代公爵が1885年に広範囲に亘る小規模の改造を行い、彼の妻ルイーザへ当てた書簡から、風呂とトイレの設置が改装計画の一部であることが明確です。1885年1月5日付けの手紙で、公爵は「バスルームに就いてだが、君の望む様にバスタブが、はまらない」と書いています。1月10日、彼は湯を溜めておく槽を、高い水圧の得られる時計塔に設置する案を報告しています。1月13日には、公爵夫人に「トイレについての案を言っていたが、何だったかね？」と、尋ねています。残念ながら、公爵夫人ルイーザは帰宅寸前であったため、文書で返答しませんでした！工事予定はなかなかはかどらなかったようで、1885年の12月31日に彼は再度「君の風呂をどうしたいと言っていたのかね？ 良く覚えていないのだが・・・」と、問い合わせています。

その後排水の問題が生じた様で、1891年に調査報告が委託され、流出口の見直しが提案されています。

古文書保管庫に残された設計図には、城内主要部に6つのバスルームが見られます。15世紀中期に「カミンの塔」へ増築された部分に設置されたこのバスルーム以外にも、「赤の寝室」脇のバスルーム(部屋番号15と16の間)があり、1921年の日本の皇太子裕仁殿下のブレア城訪問に当たり改善されました。その後1936年に取り除かれました。3番目のバスルームは「バルベニーの小塔」の3階(部屋番号23)にありましたが、これも1947年に取り除かれました。その他の3つのバスルームは、「屋根裏」の階にあり、一般公開されていません。



# 青の化粧室

部屋番号 10

公爵夫人アンはビクトリア女王の女官を努めましたので、ここには女王とアルバート公、そして彼らの9人の子供達の貴重なビクトリア印画の収集を展示しています。

左手奥には、ルイ・フィリップ(ルイ15世)時代のオルモル(銅亜鉛錫の合金)で縁取りされ7つの花柄セーブレ磁器が填め込まれたジャマイカ産黒檀材婦人用書机があります。

部屋を出た左手に2つのショーケースがあります。手前は、モッホリンで作られた陶器の収集、次は公爵夫人ルイーザと公爵夫人アンが身に付けた、19世紀の宮廷喪中装身具で、本物又はイミテーションの黒玉で作られています。宝石類は初代グレンライオン卿が収集したものです。

正面階段(詳細の説明は後記)を横切り、玄関ホールの素晴らしい眺めをギャラリーからご覧下さい。この後、32段の螺旋階段を上りますので、そこに置かれているベンチに腰掛け、一休みされては如何ですか？ 上りはここだけで、後は全て下りですのでご安心を！

絵画：窓際の系図をご覧下さい。

家具：詳細は入って直ぐ右手の壁のパネルをご覧下さい。



## 第四代公爵の廊下

部屋番号 11

第四代公爵は、広大なカラマツの植林をしたことで知られており、「植林公爵」の名で親しまれています。彼は、種を砲丸に混ぜ、大砲を撃って広く種を撒いたと言われています。

その当時に描かれた肖像画の中に、デイヴィット・アラン作の魅力的な「ハイランドの民族衣装を着た第四代公爵と最初の妻ジェーン・カスカート、及び彼らの家族」の団欒図があります。ドアの上は、ロチェスター司教ジョージ・マレイの肖像画です。彼は第四代公爵の弟で、海軍省が採用した手旗信号を発案したセント・デイヴィス司教ジョージ・マレイ卿の息子です。ロチェスター司教ジョージ・マレイは、現第11代アソル公爵ジョン・マレイの父君の曾祖父に当たります。

窓際の展示ケースの中は、ナポレオン戦争中にエдинバラとパースに収容されていた捕虜による骨で作られた工芸品の一部です。

白い大理石の胸像3点は、1815~1816年のP.ターネレリ作のウェーリングトン公爵とブルシャー元帥、コサック人のプレイトフ伯爵です。

絵画：詳細は窓の両側の系図をご覧下さい。



# ダービーの化粧室

部屋番号 13

この部屋の家具は、ほとんどがエニシダ材で作られています。エニシダは一般にハイランドの多くの道端に見られ、5~6月に小さな黄色い花を咲かせる灌木です。化粧板は、エニシダの茎を集めて圧縮して作られました。

この特殊なエニシダを化粧板に使った家具は、パースのジョージ・サンデマンが1758年頃、第三代アソル公爵の為に作ったものです。

ローマの古代寺院の縮小モデルは、メダル又はコインの収納キャビネットです。この中には金貨が隠されていると言われています。

ここに見られる水彩画もマン島の風景で、これらは1822~23年にジョージ・ウイリアム・カリングトンが描いたものです。モナ城は第四代公爵のマン島の邸宅でしたが、今ではホテルになっています。

無意味な情報を楽しまれる皆様へ：この部屋の真下に当たる「肖像画の飾られた階段」の天井に取り付けられた電灯は、この部屋の中央にあるハッチからしか、電球交換ができません。そこはカーペットの下になるため、毎年城を一般公開する前に電球を交換し、城を閉鎖するまでの7ヵ月間電球が切れることを祈っています！

家具：入り口左手にあるテーブルの上の詳細をご覧下さい。



## ダービーの間

部屋番号 14

この部屋がそう呼ばれるのは、レディ・アミリア・スタンレーと彼女の家系との拘わりからです。レディ・アメリアは、第七代ダービー伯爵と彼の妻シャーロット・デ・ラ・トレモーイの娘で、初代アソル侯爵と結婚しました。

ここには数々の重要な家具が置かれています。カールトンハウスから贈られたランカスターのギロー製と思われるジョージ三世時代のマホガニー製書き机、またその奥に置かれたジョージ三世時代のキャビネットは、アントニー・コルリッジ著「第三代及び第四代アソル公爵とキャビネットメーカー、チップチェイス社」に掲載されています。チップチェイス社が、とても魅力的な新古典派様式の緑色に塗装された軟木材製の椅子を製作しました。

ヘップルホワイトのデザインによる、18世紀の堂々としたマホガニー製4本柱寝台の周りには、市民戦争中包囲されたラサムハウスで、シャーロット・デ・ラ・トレモーイが刺繡した掛布が掛けられています。ということは、ベットのカーテンの方が寝台自体より遙かに古いことになります。刺繡が施されたベットカバーは、ポルトガル領インド製です。

部屋の奥の角に置かれている、18世紀中期のピエモンティス(イタリア)製の紫檀とクルミ材の板目を組合わせて上張りされたピエトロ・ピファテ様式の机付きキャビネットには、象牙と真珠が象眼されています。

カールトンハウスの書き机とチップチェイス製の椅子は、輸出用家具の複製モデルとして使われています。

絵画：南側の窓際の系図をご覧下さい。

家具：南窓前の低い箪笥の上の詳細をご覧下さい。



## 赤の寝室

部屋番号 15

1921年5月21日から3日間、昭和天皇がまだ皇太子の時代にブレア城を訪れ、この部屋を寝室(バスルーム付)に、一室前のダービーの間を私室として使われました。この両部屋のドアノブと窓扉のノブが、菊のご紋を型取っているのにお気付きでしょうか？

皇太子と弟殿下の一行は、アソル・ハイランダーズによる儀仗兵を受けられ、晩餐会ではバグパイプによる君が代が演奏されました。お二人は、ティルト渓谷での鮭釣りを楽しまれ、車でのクイーンズ・ビューを含む近郊を観光、ボール・ルームでハイランド・ダンスをご覧になると同時に、クラン制度とハイランドの伝統、公爵夫妻をはじめとする領民の暖かさに触れ心を動かされたと、記録に残っています。

この部屋もどちらかと言えば小さめの部屋ですが、やはり幾つかの素晴らしい家具が置かれています。ウイリアム・マスターズは、18世紀の4本柱付き寝台の骨組みを、1750年に82ポンド1シリング（82ポンド5ペニス）で、またマホガニー材で作られた透かし彫り装飾の枠付き長方形のティ・テーブルは1753年に高価格の3ポンド2シリング（3ポンド15ペニス）で、また ジョージ王朝時代中期の椅子も同時期に収めています。ベットは1989年に修復されました。壁に掛けられた18世紀中期の、金色に塗られた見事なロココ様式の額に嵌められた鏡は、1763年ジョージ・コールが納品した四枚一組のうちの一枚で、多分トマス・ジョンソンが作ったと思われます。

ジョン・チアが金を塗ったブロンズ像を製作することは珍しいことで、この部屋に置かれているいるのは、第二代公爵ジェームスです。城内の庭園には、ジョン・チアが1742年から1743年に製作した大理石、又は鉛や石の像など10点余りがあります。この部屋に置かれている数点の素焼き装飾品は、セーブレ製とパリ製の磁器です。

ドローイング・ルームに入る手前の、小さな「赤のロビー」を通り抜けるとき、精巧に彫刻された「ヴィーナスとキューピット」の象牙や、窓の上に飾られた16世紀の南ドイツ製の素晴らしい寄せ木細工の絵を見過ごさないで下さい。

絵画：最初の窓際の系図をご覧下さい。

家具：窓間の低い箪笥の上の詳細をご覧下さい。



# ドローイング・ルーム

部屋番号 16

ボール・ルーム(舞踏会場)を除いて、この部屋は城内で最も大きな部屋です。実に壮麗な部屋だと思いませんか？！ 壁に張られているのは、深紅のダマスク織りで、そのオリジナルの布地は今でも各窓間壁に掛けられた三枚の鏡の周りに見られます。

トマス・カーター作の白い大理石の暖炉が、その上のヨハン・ゾファニー作(1767年)「第三代公爵夫妻と彼らの七人の子供達」の傑出した団欒図を引き立たせています。

この部屋に置かれている数多くの家具が何度も記事に取り上げられているように、鑑定家が歓喜する逸品ばかりです。

18世紀のルイ16世様式の椅子一式はチップチェース製で、そのカバーの刺繡は第三代公爵の息女シャーロットが刺したものです。ゾファニーの団欒図の中で、花輪を持っているのがシャーロットです。

一対の18世紀の金張り装飾された燭台用スタンドは、トマス・チッペンデールの作です。後期摂政時代のキャビネットは、リバプールのジョージ・ブラックが第四代公爵の為に作ったもので、ティルト渓谷産大理石が上板として、また公爵の好んだカラマツ森林のカラマツが化粧板に使われています。

マイセンのカケスの置物、一対のルイ15世時代の模造金<sup>オルモル</sup>の縁取りに黄色の上薬の掛けられた中国製陶器の壺、三棹の19世紀中期フランス製のユリノキの板目を組合わせて上張りされたキャビネット、大きなウイルトン製カーペット、18世紀のオランダ製皮革製スクリーン、網羅したら限がありません。

ゾファニーの団欒図に戻りますが、絵の中で「アライグマ」、実際には尻尾が輪状に交互に色分けされたキツネザルは、青の寝室近くにある裏階段の真ん中の窓の檻に飼われていました。その檻は、1885年に水力荷揚げ機が設置されたとき取り除かれ、その後1960年代初期にその荷揚げ機が取り除かれました。何事も時の移り変わりです。

絵画：最初の窓際の系図をご覧下さい。

家具：部屋に入って最初の大理石の上板のテーブルの上の詳細をご覧下さい。



## タリバーデンの間

部屋番号 17

ここで15世紀の増築部分に戻ります。1745年ボニー・プリンス・チャーリーがこの部屋を着替えの間として使ったと言われています。従ってこの部屋が、初代公爵の次男タリバーデン侯爵ウイリアムと彼の弟ジョージ・マレイ卿の二人のジャコバイト党員を記念しているのは適切でしょう。

タリバーデン侯爵ウイリアムは、称号と領地を主張できる彼の権利(長兄が 1709年にマルプラケイで戦死)を没収されました。しかし、ジャコバイト党員の間では「ウイリアム公爵」と呼ばれ、亡命していたプリンス・チャールズ・エドワード・スチュワートと共に上陸した「モイダートの七人」の一人であり、グレンフィナンでのジャコバイト党の旗は、彼自身の手で揚げられました。

ジョージ・マレイ卿は、1745年のジャコバイト蜂起で、チャールズ・エドワード・スチュワート(愛称ボニー・プリンス・チャーリー)の優秀な陸軍中将でした。ジョージ卿はゲール語を自在に話せる将軍で、「プレストンパンの戦い」に始まり 1746年4月の避け難い「カローデンの戦い」の悲惨な敗戦まで、ジャコバイト軍を効果的に指揮し、驚くべき勝利の数々に導きました。ジョージ卿は、1760年亡命先のオランダで亡くなり、メデンブレックに埋葬されました。

天幕ベットは、200年以上経ったタータンで覆われています。それは、かつてタリバーデンのディヴィット・マレイ卿の17人の息子達が使った、更に古く丸いベットに掛けられていたと言われています。これには別の話があります。

北側の小さな窓の上には、ジャイルズ・ハッセイ作のプリンス・チャールズ・エドワード・スチュワートの素晴らしい肖像画(A)があります(その両側は彼の両親)。

絵画：暖炉の上のパネルをご覧下さい。

家具：暖炉の上の詳細をご覧下さい。



# タペストリーの間

部屋番号 18

ここは城内でもっと古い「カミンの塔」の三階になります。この名が付けられたのは、この部屋を取り巻くタペストリーに由来します。この素晴らしいタペストリー一式はチャールズ一世の為にモートレイクで作られましたが、クロムウェルの命令で売却され、1696年タリバーデン伯爵(後の初代公爵)によって購入されました。

「ウイリアム王とメアリー女王」様式の王侯貴族用ベットは、ベットの周りにその当時そのままのスピタルフィールズ産シルク地の垂れ布と、ダチョウの羽毛のボンボンが付いています。このベットは、元々ホリルド宮殿の初代公爵の寝室に置かれていたのを、1709年にブレア城に移動したものです。本当にそうだったのでしょうか？ 公爵がスコットランド玉璽尚書ぎょくじしようしょであったときはホリルド宮殿に私室を持っていたとしても、彼は1704年にその役職を失っています。1707年1月にスコットランドとイングランドの合併条約に反対し、その後噂されていたフランスの侵略を指示していると疑われました。そして1708年始め、彼は大逆罪に問われました。しかし病の故1708年4月から、1708年7月に保釈されるまでブレア城に幽閉されました。従って、彼は疎まれただけではなく、1709年にベットが発送される前の数年の間、ホリルド宮殿に私室を保持していたとは考え難いと思われます。いろいろな推測がなされていますが、まだこれを説明する記述は見つかっていません。調査は続けられます！

暖炉の上に置かれた19世紀の時計は、「リシェルゥ大司教の時計」と言われています。17世紀のサイドテーブルの上に置かれている箱は、初代公爵が1707年の合併以前にエディンバラにあったスコットランド国会で使った書類ケースです。

家具：テーブルの上の詳細をご覧下さい。



# タペストリーの化粧室

部屋番号 19

小部屋ですが、ここにも幾つかの興味深い家具が置かれています。

アン王女時代のクルミ材とイチイの瘤材の化粧板を使った本棚付き書机も、ウイリアム・マスターズ製で、1963年10月版の雑誌「<sup>コニスター</sup>鑑定家」の中のアントニー・コルリッジ著の記事「ウイリアム・マスターズとブレア城の18世紀初頭の家具」の中で言及されています。

骨組みがマホガニー材で作られた長椅子はジョージ一世時代のものです。マホガニー材の製図用デスクは、ジョージ王朝時代中期のもので、多分ジェームズ・マレイ将軍(1734–94年)が使ったものと思われます。

二点の肖像画は共に、初代公爵の最初の妻レディ・キャサリンです。

部屋を出られる前に、ジョージ王朝時代中期のマホガニー材の木箱に入った「永久暦付き温度計と気圧計」が右手に掛けられているのをご覧下さい。

正面階段を横切って、真直グレンライオンのロビーへお進み下さい。

絵画：入って左側の壁に掛かっている系図をご覧下さい。

家具：製図用デスクの上の詳細をご覧下さい。



## グレンライオンのロビー

部屋番号 20

まず大変素晴らしいキャビネットが目に留まるでしょう。これはマホガニー材で作られたウイリアム・ケント様式のキャビネットです。

初代グレンライオン卿ジェームズは、第五代公爵の弟です。グレンライオン卿の妻レディ・エミリー・パーシーは小さな肖像画(48)に見られます。

キャビネットの正面には、エドウィン・ランドシア卿作、初代グレンライオン卿の三男ジェームズ C. P. マレイの素敵なスケッチ(59)があります。彼の兄、第二代グレンライオン卿(長男は夭逝)が、1846年彼の伯父の死去に伴って第六代公爵を継承しました。

絵画：壁際の系図をご覧下さい。



## バンビーの間

部屋番号 21

この部屋に置かれている彫刻された檻材の家具の殆どは、ビクトリア女王とアルバート公が、1844年に三週間ブレア城に滞在されるに先立ち、1842年ウェップ社から購入されたものです。

これらの家具はこの階に展示されていますが、女王一行はこの階下にある部屋も使われました。ビクトリア女王は、王室一家の胸像や小像を含む様々な贈り物を下賜されました。

女王はその二年前に、ダンケルドでアソル・ハイランダーズの護衛を受けました。左手の壁に掛けられた絵(53)はその折の情景で、第二代グレンライオン卿ジョージが、護衛隊を指揮するメギンチのドラモンド陸軍大尉に指図を与えています。

1844年のビクトリア女王滞在後、アソル・ハイランダーズは1845年に最初の軍旗を下賜されました。

グラーヴィス作の肖像画(57)は、後にアソル公爵夫人になったアン・ホーム・ドラモンドで、彼女はビクトリア女王の女官であり衣装女官長でした。

絵画：ドアの左手の系図をご覧下さい。



## バンビーの化粧室

部屋番号 22

この部屋の性格も前室と同様です。右手の壁には、第七代公爵が描かれた小さな磁器(J)と、暖炉の上には彼の妻ルイーザ・モンクリーフと彼女の7人の姉妹が、手染めされた写真(N)があります。彼らの6人の子供達の水彩画(193–198)は、北側の壁に掛かっています。

シュスボク材の家具は、ロンドンのホランド製です。前面が3つに分かれた一対の本棚には、ティルト渓谷産の大理石が載せられています。

糸紡ぎをしているビクトリア女王の赤土素焼きの小像は、1869年に女王から公爵夫人アンに贈呈されたものです。これと、部屋の出口手前に置かれたハイランドゲームの各種像のオリジナル銀製小像は、バルモラル宮殿の一般公開中、そのボール・ルーム(舞踏会場)に展示されます。

彫刻の施されたマホガニー材の大きなケースに入った柱時計には、文字盤中央にロンドンのパイン社の銘が彫られ、公爵の小冠とAの頭文字が湾曲した木製の彫り物に描かれています。これは1856年に、31ポンド10シリング(81ポンド50ペンス)で購入されました。

「バンビーの小塔(部屋番号23)」には、第八代公爵夫妻と第九代公爵の遺品や、第十代公爵の幼少時代の写真を含む、1950年代までのブレア城とその姻戚関係の歴史を説明する資料が展示されています。

絵画：この部屋に入って直ぐ左の窓に掛けられている系図をご覧下さい。

家具：右手の壁のパネルをご覧下さい。



## 正面階段

部屋番号 24

この見事な階段を降りるにつれ、数々の興味深いアイテムに気付かれるでしょう。鹿の角で出来たシャンデリアと、踊り場に置かれた鹿の角で出来た椅子は、共にドイツ製で、1841年にレディ・エミリー・グレンライオンがワイスバーデンで買い求めたものです。

白く長い象牙の様なものがユニコーン(一角獣)の角だ、と云う噂は事実ではありません。北極鯨であるイッカククジラの歯です。

アバーケアニィのジェームズ・モレイ(ジュニア)の肖像画(107)は、多分ジェラマイア・デイヴィットソンの手になるものだと思われます。この絵は、1745年のジャコバイト蜂起の後、キルト(バグパイプも)が禁止されていた時代に描かれており、何故署名が無いか、が多分それで説明できるでしょう。

次の踊り場には、ジョン・ホップナー作の第四代公爵の一番末の息子チャールズ・マレイ卿の肖像画があります。彼は、バイロンと同様ギリシャ独立戦争を支援中、亡くなり、彼の地ガストゥーニィのプロフィット・エライジャの教会に埋葬されました。

正面階段を下り切った所(最後の段に注意)には、1839年にエア州のエグリントンで開催されたトーナメントで、グレンライオン卿(後の第六代公爵)が使った馬上槍試合用の武具一式と公爵の紋章の入った馬飾りがあります。

トバモリー湾で沈没したスペインの無敵艦隊の大帆船からの2砲の大砲は、かつての正面玄関へのアーチ通路(現在はチケットオフィイス)の両側に置かれています。

次の部屋であるテラスの間は、廊下へ出て正面の部屋です。

絵画：正面階段を下る前と中程の踊り場の系図をご覧下さい。



# アソル・ハイランダーズの間

部屋番号 26

アソル・ハイランダーズは、今日のヨーロッパで唯一、公式に認められた私兵です。その連隊本部は、ここブレア城に置かれています。

「ハイランダーズ」は最初アメリカ独立戦争中、第四代アソル公爵によって1777年に正式に募兵されました。しかし、当初予定されたアメリカへ送られる代わりに、連隊はアイルランドに送られ、そこで5年間駐屯し、1783年に解散されました。

それから長い歳月が経過した1844年、後の第六代公爵となったグレンライオン卿が、ビクトリア女王のブレア城滞在の3週間、女王警護のためにアソル領民の男達を招集しました。この功労とその前のダンケルドでの護衛を認めて、女王は翌年、アソル公爵及び彼の爵位継承者に、私兵「アソル・ハイランダーズ」を招集する正式な権利を授ける象徴として、女王旗とアソル・ハイランダーズ軍旗を下賜するための女王代行をレディ・グレンライオンに依頼しました。

アソル・ハイランダーズが最強の時で、20人のバグパイパーを含む総勢260人でした。現在は、ほぼ100名です。今まで城内で皆様がご覧になられた、刀と盾、戦い用の長柄の斧、騎兵銃、リー・メトフォードとリー・エンフィールド4番銃等で、彼らは長い年月に亘り武装してきました。

アソル・ハイランダーズは、通常連隊長である第11代アソル公爵ご臨席のもと、毎年5月下旬に城の前庭で観兵式を行います。

この部屋は、1777年から現在に至るまでの「アソル・ハイランダーズの歴史」を紹介するため設置されましたが、その一部には、第八代アソル公爵が1900年に組織し、ブーア(南ア)戦争及び第一次世界大戦で指揮した、スコットランド騎兵連隊に関するセクションも設けられています。



## 宝 物 室

部屋番号 27

城内の展示は、極力最新情報を含むよう常に改善が期されています。この部屋は、個人の宝石類や細密画、嗅ぎ煙草入れ、エトウィ・ケース、ジャコバイトの遺品など、珍しい様々なアイテムを紹介するため、1983年に設置されました。こういったものを他で見ることは稀でしょう。

代々のブレア城の家人達は、流行遅れになったからと云って日常の品々を捨ててしまわなかったのが、幸いでした。

この様な部屋では何回訪れても、常に以前見落とした何かを見つけることが出来ると言えましょう。当城の職員でさえ、ここで新たなものを発見し、更に再発見することを楽しんでいます。

とにかく、ジャコバイトの遺品であれ、素晴らしい宝石であれ、細密画や家人の形見であれ、皆様の興味をもたれるものが何かしら見つかることでしょう。



## ボール・ルーム(舞踏会場)

部屋番号 30

この素晴らしいボール・ルームは、第七代アソル公爵が1876~77年に建てたもので、ジェームズ・ガサリー卿作の彼の肖像画が、ステージの右手に掛けられています。

この部屋に飾られた武器や鎖甲冑、太鼓、その他の記念の品は、彼の息子第八代公爵がスーザン戦争(ファショダ事件)帰還時に持ち帰ったもので、この手の収集ではカリファ宮殿のそれを含めても当城が最高だと云われています。

第八代公爵の肖像画は、「楽団用バルコニー」の左側にあります。これは、彼のタリバーン侯爵時代にスコットランド騎兵連隊の制服姿で描かれたもので、この騎兵連隊は彼が組織し、南アフリカ戦争と第一次世界大戦中ガリポリで彼自ら指揮を取りました。

「楽団用バルコニー」の右側は、ランドシアの有名な絵「ティルト渓谷の雄赤鹿の死」です。その他で良く知られた絵画では、ステージの左手に掛けられているヘンリー・レーバーン卿の描いたニール・ガウの肖像画があります。ガウはダンケルドのインヴァー出身の著名なフィドラーで、第二代、第三代、第四代の各公爵に仕えた音楽家でした。彼のフィドルとその弓をかけて置くための鉤、剃刀砥石、ナイフが肖像画の下にあるガラスケースに展示されています。

ステージ中央に置かれているケースには、18世紀初期のバグパイプがご覧頂けます。これは第四代アソル公爵のお抱えバグパイパーだったジョン・マグレガーのものでした。このバグパイプは、マグレガーの祖父、同名のジョンが1745~46年のジャコバイトの戦いで、プリンス・チャールズ・エドワード・スチュワートに伴って演奏したものです。

この部屋は、ハイランド・ボール(舞踏会)や晩餐会、昼食会、レセプション、コンサート、結婚披露宴、そして恒例となった重要なグレンフィデッヒ世界バグパイプ選手権など、今でも幅広い用途に使われています。



## 陶器の間

部屋番号 31

この部屋が何故こう呼ばれるのか、正解しても特に賞品はありません！

この収集は沢山の有名な陶器工場からのもので、コールポート、チャルシー、マイセン、ダービー、ドレスデン、ウスター、ロイヤル・ウスター、ウェッジウッド、デルフト、スタフォードシャイヤー、中国製の紋章付、中国、日本・・・数え上げたら限がありません。

人にはそれぞれ自分の好みがありますが、最も良く取り上げられるのは、アソル公爵の紋章が描かれた18世紀中国製の大皿食器セット一式、ダービー製の黄色で縁取りされた花柄のデザート用食器セット、同様に美しいセーブレ製の手描きのプリントと花柄デザート用食器セットです。陳列ケースの一番上に飾られているドレスデン製の大皿ディナーセットは、1839年にアソル公爵夫人となったアンへの、彼女の父君からの結婚祝いです。

部屋の中央には、第七代アソル公爵の息女レディ・エヴリン・スチュワート・マレイが収集し、また彼女自身が手掛けた極めて美しい刺繡の何例かが展示されています。彼女の作である紋章の刺繡は英國刺繡の最高傑作の一つと云われています。

刺繡の陳列ケースは定期的に交替されます。刺繡愛好者のグループには早目にご連絡頂ければ、現在展示されていない幾つかのケースを別室にてご紹介します。